

論 文

力織機工場の女工就業

—— 瀧田商店自営工場の分析 ——

橋 口 勝 利

要 旨

本稿は、近代日本の地域で工業化が進んでいく中で、「資本-賃労働」関係が成立していたかどうかを検討する。この分析から、1920年代の知多産地綿織物業では、農村女性が農家労働の制約から離れ、近代的労働者として就労していたことが明らかになった。これによって、地域の工業化の進展に伴って成立した力織機工場において、労働市場が成立していたことが判明した。

キーワード：工業化；近代的労働者；労働市場

経済学文献季報分類番号：04-23

はじめに

本稿の目的は、知多産地で力織機化した工場が、農村から募集した女性を近代労働者として行うことができていたのかどうかを検討することにある。

大都市を中心に成長を続けていった紡績業と異なって、綿織物業は地域の農村部を基盤として生まれ成長することが多かった。近代化が始まった明治期では、問屋制家内工業が広範囲に展開し、地域商人から原料綿糸を受け取って綿布生産を請け負う賃織農家が各地に存在した。この時期は、手織り機を用いて各農村で綿布を生産するため、作業は農家の婦女子が主として担当した。そのため農家婦女子は、農繁期に機織り業に従事することは難しかった。つまり農家婦女子は、各農家の農作スケジュールから強い影響を受けていたのである。つまり問屋制家内工業のもとでは、農村女性は農家家族の制約から切り離されておらず、労働市場と間に「仕切り」があった¹⁾。

1) 高村直助「書評 谷本雅之著『日本における在来的経済発展と織物業-市場形成と家族経済-』」『史学雑誌』第107編第12号、1998年12月。一方で農家は、農作スケジュールの制約を受けながらも、

しかし、力織機が各産地に設立されるようになると、問屋制家内工業という生産組織は変化を迎える。例えば、綿糸布を集荷していた商人が直接力織機工場を設立するケースや、賃織農家が力織機工場を設立するケースが、相次いで見られるようになった。このような事態が生じると、綿布生産を行う場合、労働者を工場に集めて、一定期間および一定時間、綿布生産に従事させることが必要となる。つまり、近代的労働者を生み出すことこそ綿織物産地が工業化を進めていく上で必要となるのである。

工業化が進む綿織物産地で近代的労働者が生み出されていたかどうかという論点に焦点を当てたものとして、播州綿織物業を対象にした佐々木淳の研究がある。佐々木によれば、1910年代に播州において工業化が進む中で、力織機工場では、女工が集中作業場に集まって賃金労働に従事していたという。しかし、その就業実態は、各女工がそれぞれの家事労働の制約に縛られ、就業日数も安定しなかったという点で、近代的労働者と呼ぶには不完全であった²⁾。つまり、力織機工場設立が相次ぐ第一次大戦ブーム期は、農村から近代的労働者が生み出される過渡期であったのである。

播州と同じく第一次大戦ブーム期に力織機工場が多数生まれた知多産地も、女工を集めるという課題は同様であった。そのため、知多産地の力織機工場で就業する女工が、農村から切り離された労働者となったのかどうかは課題となる。この課題を解明することによって、知多産地に労働市場が成立していたのかどうかを明らかにすることができる。このことで、在来産業が発展するなかで、農村から分断された近代的労働者が成立し地域の産業革命が達成されたのかという点も明らかになるであろう³⁾。

なお、本稿の課題を解明するにあたっては、知多産地の有力綿布商である瀧田商店が有していた自営工場（以下、瀧田自営工場）を検討対象としてとりあげる。

〔1〕 瀧田自営工場の概要

〔1〕 資料

瀧田自営工場の実態を解明するにあたって、瀧田商店資料『賃金支拂簿』を利用する。この資料は、瀧田自営工場の各職工について、出勤日数・休日及欠勤日数・稼高・賞罰・食費・買収（稼高から賞罰を加えて食費を差し引いた金額）・貯蓄金共済金・渡金・渡金月日が記

農作業・家事労働・機織り業に家族労働を柔軟に配分することで効率的な家族経営を実現したことも指摘されている。谷本雅之『日本における在来的経済発展と織物業』名古屋大学出版会、1998年、第2部。しかしこれは、問屋制家内工業段階における農村のあり方を解明するにとどまり、工業化するなかでの農村のあり方を示すうえで課題を残している。本稿はこの論点について検討していく。

2) 佐々木淳『アジアの工業化と日本』晃洋書房、2006年2月、第三章。

3) 谷本雅之『日本における在来的経済発展と織物業』名古屋大学出版会、1998年、第2部。

されている。この記録は、ひと月ごとに記されているために、季節に応じた労働日数を知ることができる。なお、『賃金支拂簿』は1922年～1927年まで確認することができるので、第一次大戦ブームで設立された力織機工場の女工（および男工）の就業実態を中心に検討していく。ただし、出身地については残念ながら記されていない。

【2】瀧田自営工場の概要

（1）生産綿布

瀧田商店の自営工場の性格について、まず公開資料から確認しておきたい。表1は、主に『紡織要覧』による情報を中心に瀧田自営工場の所在地・製品・織機・職工人数・動力を記している。

表1 瀧田自営工場

年	工場名	所在地	製品	織機			職工人数			動力
				種類	台数		男工	女工	合計	
1918	瀧田貞一	常滑町	白木綿	井桁式	大幅	56	12	75	87	ガス20
1922	瀧田貞一	常滑町	白木綿	名古屋式	小幅	100	…	…	…	ガス20
1924	瀧田織布工場	常滑町	白木綿	…	…	…	7	26	33	…
1928	瀧田貞一	常滑町	…	名古屋式	小幅	100	…	…	…	電気20
1929	瀧田貞一工場	常滑町	晒生地	名古屋式	小幅	100	…	…	…	電気20
	瀧田貞一川端工場	西浦町	天竺	デッキンソン	二幅	31	…	…	…	ガス25
1930	瀧田貞一工場	常滑町	晒生地	名古屋式	小幅	100	…	…	…	電気20
	瀧田貞一川端工場	西浦町	天竺	デッキンソン	二幅	31	…	…	…	ガス25
1935	瀧田益四郎川端工場	西浦町	改良	豊田式	小幅	46	2	7	9	電気10

注1) 「…」は不明であったことを示す。

注2) 単位は、織機台数は「台」、職工人数は「人」。

資料) 『紡織要覧』各年度版。ただし、1924年のみ、愛知県商工課編『愛知県工業名鑑』1924年を利用した。

この表1から瀧田自営工場の特徴に応じて4つの時期に区分することができる。

① 第一次大戦ブーム期：設立期

1919年版『紡織要覧』によれば、瀧田自営工場は1916年8月に設立されたと記録されている。瀧田商店は、第一次大戦ブーム期の波に乗って井桁式大幅（広幅）織機56台を有する自営工場を設立したのである。これは輸出向け広幅綿布生産を主軸とする当時の瀧田商店の経営戦略に沿うものであった。

② 1920年代：小幅綿布生産へ転換

1920年代の瀧田商店は、国内市場向け小幅綿布生産に生産を転換させた。この戦略転換を受けて瀧田自営工場は、1922年には名古屋式小幅織機100台を新たに導入し、小幅綿布生産工場へとその姿を変えた。

③ 1929年・1930年：第2工場を併設

瀧田商店は、従来の瀧田貞一工場に加えて、瀧田貞一川端工場を新たに設置して生産規模を拡大した。ただしこの工場は、小幅綿布生産を目指したものではなく、デッキンソン二幅織機31台を有し、広幅綿布「天竺」を生産していた。したがって、瀧田商店は、小幅木綿・広幅木綿双方の自営工場を有するに至ったのである。

④ 1930年代中頃：生産規模の縮小

1935年になると、自営工場は瀧田益四郎川端工場のみとなり、生産規模は大きく縮小した。まず主力工場の瀧田貞一工場が閉鎖された。それに伴って瀧田貞一川端工場の主力製品は広幅綿布から小幅綿布へ転換した。このため瀧田貞一川端工場には豊田式小幅織機46台が新たに設置された。瀧田家の自家伝によれば、瀧田益四郎は、瀧田貞一の四男で実質的な経営権を引き継いでいたという⁴⁾。おそらく、貞一から経営権を引き継いだ際に、瀧田益四郎は、小幅綿布生産への特化と、自営工場の生産縮小とを決断したと考えられる。

(2) 職工人数

瀧田商店の職工人数については、『紡織要覧』で記載されている情報は限られている。そのなかで判明する数字を基にしながら瀧田自営工場の職工数の変化を検討する。まず、第一次大戦ブーム期の1918年では、男工12名・女工75名で合わせて87名の職工を有していた。続いて1920年代は、『紡織要覧』で職工数を確認できなかったが、1924年版『愛知県工業名鑑』で職工数を確認できる。これによれば、男工7名・女工26名で合わせて33名が就業していた。ただし、この女工26名という人数は、1924年当時のすべての職工数を反映したものである。この点についてはのちの節で詳細に検討する。

1929年・1930年の職工数は残念ながら判明しなかった。1935年は、織機数が46台へと縮小するに伴い、男工2名・女工7名で合わせて9名へと削減された。

このように瀧田商店は、製品綿布（小幅木綿・広幅木綿）や生産体制（下請織布工場）の変化に応じて、自営工場の織機や労働者を変化させていた。

〔2〕 製織女工の就業状況

【1】 勤務日数

女工の勤務実態を『賃金支拂簿』を通じて具体的に検討していきたい。表2は、勤務日数（1年間あたり）によって女工を分類して、6年間の推移を記している。

4) 瀧田貞一の社長職は、貞一次男の英二が引き継いでいた。ただし、瀧田商店の実質の経営は、益四郎（貞一の四男）と五郎（貞一の五男）が担当した。瀧田資也編著『HISTORY あたたかい光とやさしい風につつまれて』、2008年8月。

表2 女工勤務日数の推移

勤務日数	1922年	1923年	1924年	1925年	1926年	1927年
300日以上	2	2	3	6	3	8
250日以上 300日未満	13	9	7	6	9	14
200日以上 250日未満	4	4	8	4	12	7
小計	19	15	18	16	24	29
%	27.9	20.5	23.1	21.9	35.8	56.9
150日以上 200日未満	11	6	3	7	9	6
100日以上 150日未満	10	12	7	11	6	4
小計	21	18	10	18	15	10
%	30.9	24.7	12.8	24.7	22.4	19.6
50日以上 100日未満	6	9	11	17	5	4
50日未満	22	31	39	22	23	8
小計	28	40	50	39	28	12
%	41.2	54.8	64.1	53.4	41.8	23.5
合計	68	73	78	73	67	51

注) 単位は「人」

資料) 瀧田織布工場『賃金支拂簿』各年。

先の表1では、1924年の女工数は24名であった。これに対して表2では合計78名が1年間に瀧田自営工場勤務に携わっていたことから両者は一致しない。ただし勤務日数をみれば、年間200日以上勤務した女工が18名、そして年間100日以上200日未満勤務の女工が10名である。おそらく年間を通じて勤務日数の多い女工を「正規労働者」とみなし、女工数を24名と記録したのでないかと考えられる⁵⁾。

このように、女工の年間勤務日数にはバラつきがあった。この勤務日数について6年間の変遷を検討すると、年間200日以上勤務する女工は、1922年～1924年までは20%台に止まっていたものの、1926年から増大に転じて1927年には約57%に達するに至った。これは、1年間を通じて安定して就業する女工が瀧田自営工場の主力をなしてきたことを示している。一方で1年間の就労日数が不安定な女工の動向をみると、まず年間の勤務日が100日に満たない女工は、1922年の約41%から1924年には約64%と期間を通じてピークを迎えた。しかし1925年から減少に転じて、1927年には約24%にまで減少した。同じく、年間勤務日が100日以上200日未満の女工も、1922年に約31%であったものの、1925年から減少の一途をたどり、1927年には20%を割り込むに至った。つまり、一時的な増大をみせるものの、期間を通じて減少傾向にあったことがわかる。

つまり瀧田自営工場は、1920年代の自営工場経営の中で、1年間を通じて安定して勤務できる女工を確保するようになっていったのである。

5) 表1で記された1918年の職工数87名は過大であると考えられる。おそらく、一時的に就労した女工を含めた数字と考えられる。

【2】勤続年数

女工の勤続年数を表3から検討していく。

表3は、1922年～1927年で瀧田自営工場に勤務経験のある女工96名について、それぞれの勤務日数順にランキング化したものである。これによれば、とりあげた6年間のう

表3 女工の勤務日数ランキング

順位	名前	1922年	1923年	1924年	1925年	1926年	1927年	総日数	順位	名前	1922年	1923年	1924年	1925年	1926年	1927年	総日数
1	亀岡は奈	291	297	297	285	315	278	1,763	49	伊藤やす	22	157		159	20		358
2	片岡ゆう	205	293	313	311	222	30	1,373	50	滝田シズ子				13	84	254	351
3	柴田せ以	287	289	288	239	139		1,242	51	八木志げ	305	41					346
4	中野てう	274	293	41	100	287	230	1,225	52	月東シン					79	263	342
5	鈴木はつ子		103	261	304	235	300	1,203	53	神谷はつ		86	138	102			326
6	水野小春		1	260	318	288	315	1,182	54	村田は奈	158	161					319
7	山本さく	125	294	321	311	117		1,168	55	渡邊タツ				275	42		317
8	盛田ちょう	241	309	52	283	239		1,124	56	盛田ミサオ					44	271	315
9	村田うめ	117	255	227	292	146		1,037	56	滝田ユキ				97	218		315
10	水野くま子		190	161	86	306	271	1,014	58	筒井ムラ					33	279	312
11	日比せき		141	288	96	211	268	1,004	59	磯本かね		5	112	141	51		309
12	茶谷まき	89	280	239	160	169	6	943	60	柳原きん			84			217	301
13	土井ひで	183	274	31	155	282		925	61	森下とみ		24	203	68			295
14	土井はつ	101	163	215	55	78	266	878	62	初山みつゑ	176	116					292
15	伊藤かね			128	255	246	247	876	63	伊藤小とみ		149	141				290
16	桑山ふみ		209		265	194	184	852	64	齊田志げ	128	103	54				285
17	山本志う	259	264	239	88			850	65	古神はま	252	27					279
18	水野ひ奈			98	223	238	208	767	66	増田きょう	151	127					278
19	久田トウ				195	228	307	730	67	亀岡古と			263	10			273
20	鯉江フサ				90	292	299	681	68	角野とみ恵			245	24			269
21	桑山君枝				95	279	304	678	69	伊藤ふじゑ		129		136			265
22	江本トヨ				87	260	318	665	70	森下志よう		1			69	187	257
22	浦川ヤス				129	258	278	665	71	瀧田せ以	186	42					228
24	伊藤はつ			44	170	200	226	640	72	瀧田坐き	176	26					202
25	桑山のう	284	219	133				636	73	谷川りつ			169	22	6		197
26	佐藤ナツ					317	316	633	74	松井ユミ					187	5	192
27	仙河みつ			114	334	146		594	75	伊藤多きえ		144	36				180
28	伊藤かつ	290	128	42		28	93	581	76	青木ツネ				128	44		172
29	稲葉ヨシエ					272	289	561	77	野口イク				15	139		154
30	皆川ユキ子				47	266	246	559	78	伊藤や江			66	79			145
31	佐藤なつ			229	321			550	79	河合とみ			118	26			144
32	柳原コト				143	196	196	535	80	水上きみゑ		70	41				111
33	水野りょう			54	193	166	111	524	81	河合のぶ	100	10					110
34	水野きぬえ	187	62		66	208		523	82	渡邊ツネ					6	101	107
35	桑山つや	313	186					499	83	永田座め	3	94					97
36	竹内イヲル					175	314	489	84	鈴木とく			55	20	20		95
37	下村坐め	297	183					480	85	岡戸やす	55	38					93
38	赤井すゑ			42	220	208		470	86	水上よし江			8	78			86
39	伊藤フクエ				161	296	457		87	新海ミツノ					27	53	80
40	江本キク				230	196	426		88	加藤さく			10	66			76
41	清水小菊	299	122					421	89	小西はる		68	4				72
42	渡辺ゆき	129			100	191		420	90	園尾はるよ		27	32				59
43	亀岡古坐	290	127					417	91	服部ツヨ			51	5			56
44	伊藤古よ	237	143	36				416	92	富本はな			25	24			49
45	柳原キン				210	185		395	93	山田坐く		40	1				41
46	伊藤すへ	164	228					392	94	磯村トウ				11	11		22
47	塩谷みど里	192	30	152				374	95	鯉江シナ					5	7	12
48	中野湯つ		46	324				370	96	赤井チヨウ				1	1		2

注1) 1922年～1927年間で複数年にわたって工場に勤務した女工のみを取り上げた。

注2) 単位は「日」。

資料) 瀧田織布工場『賃金支拂簿』各年。

ち、5年以上瀧田自営工場に勤務した女工は14名、3年以上勤務した女工は30名以上に達している。例えば当時の紡績女工の場合、契約就業年数が3年間だったことを考え合わせると、瀧田自営工場でも3年間勤務を実現しうる女工を集めることを目安としていたと考えられる。だとすれば、瀧田自営工場は安定して就業する女工を確保していたといえる⁶⁾。加えて、年間勤務日数が200日未満の女工についても複数年勤務するケースが見られることから、季節的に就業する女工も一定期間にわたって確保していたといえる。

同じく男工の就業状況を表4で確認しておく。

表4 男工勤務日の推移

順位	名前	1922年	1923年	1924年	1925年	1926年	1927年	合計	順位	名前	1922年	1923年	1924年	1925年	1926年	1927年	合計
1	磯村富次郎	131	249	301	323			1,004	29	申次奉					134		134
2	金三峰			12	349	338	288	987	30	堀江五郎吉				114			114
3	磯村保二	134	316	91	18	251	155	965	31	森田幸雄					106		106
4	金億石	343	347	215				905	32	磯村菊路						93	93
5	金麒振		259	333	293			885	33	古川傳太郎	84	2					86
6	金風祚		107	325	339	96		867	34	出開敷閑太郎	86						86
7	竹内新一郎	174	312	40				526	35	木村末吉	71						71
8	三浦幸太郎					116	365	481	36	榊原徳三郎	69						69
9	新海新次郎	89	318	58				465	37	柴田倉吉	62						62
10	森下良吉	150		252	59			461	38	井本新之丞	61						61
11	李用守	314	84					398	39	渡邊藤太郎		42					42
12	久田豊吉					52	334	386	40	渡辺糸次郎	40						40
13	橋本嘉吉						329	329	41	呉且雲			33				33
14	尹基元	253	70					323	42	杉浦興一郎				28			28
15	三浦太郎						313	313	43	家田伸吉			26				26
16	竹内金蔵				246	56		302	44	森本文蔵						23	23
17	榊原文之助					208	30	238	45	呉金祚		20					20
18	金士律				164	70		234	46	金斗相	18						18
19	金元達			195	29			224	47	向古以		16					16
20	杉井増市郎					214	6	220	48	金原源一	15						15
21	金者恵			199				199	49	杉本安太郎				14			14
22	西村盛造						195	195	50	鄭載千			10				10
23	申閑龍		61	123				184	51	森下志与朗	10						10
24	申劉永					168		168	52	久留幸松					4		4
25	東川菊雄					167		167	53	杉江金一				3			3
26	金寿風				53	104		157	54	鄭基鎔				2			2
27	山本元吉					151		151	55	蟹江照治	2						2
28	中村体造			141				141									

注1) 男工は勤務日数順に並べている。

注2) 単位は「日」。

資料) 瀧田織布工場『賃金支拂簿』1922年～1927年。

表4は、瀧田自営工場で就業した男工を勤務日数順にランキング化したものである。先に検討した表1で、1924年の男工数は7名と記録されているが、実際には16名の男工が織布業に関わっていた。ただし、年間200日以上勤務していた男工が5名、100日以上200日未満の男工が4名だったことから、主力となって勤務した男工を職工として記録したと考えら

6) 橋口勝利「近代日本紡績業と労働者」(関西大学経済・政治研究所「大阪の都市化・近代化と労働者の権利」研究双書第161冊、2015年3月)。

れる。ただし全体としてみれば、上位 16 名（勤務日数の合計が 300 日を超える上位層）を見た場合、年間で 200 日以上勤務するメンバーは比較的少なくバラつきも大きい。加えて勤務年数は 2 年～4 年以上の男工がおり、これもバラつきが大きい。おそらく男工を各年で 4～5 名程度確保して、その不足分を一時的に勤務するメンバーが補うというパターンが形成されていたと考えられる。

【3】勤務日数の変化と女工

これまでの検討から瀧田自営工場の女工は、勤務日数に応じていくつかのグループに分類できる。そこでそれぞれのグループが、どのような勤務日数の推移を示すのかを検討する。そのために、先の表 2 をもとにして以下の 4 グループを設定する。

I グループ：勤務日数 300 日以上（安定労働者）

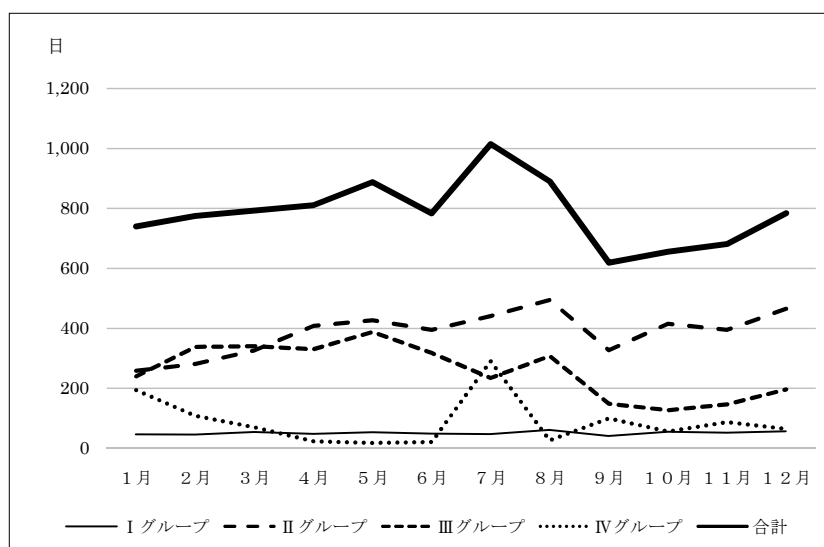
II グループ：勤務日数 200 日以上 300 日未満

III グループ：勤務日数 100 日以上 200 日未満

IV グループ：勤務日数 100 日未満（短期労働者）

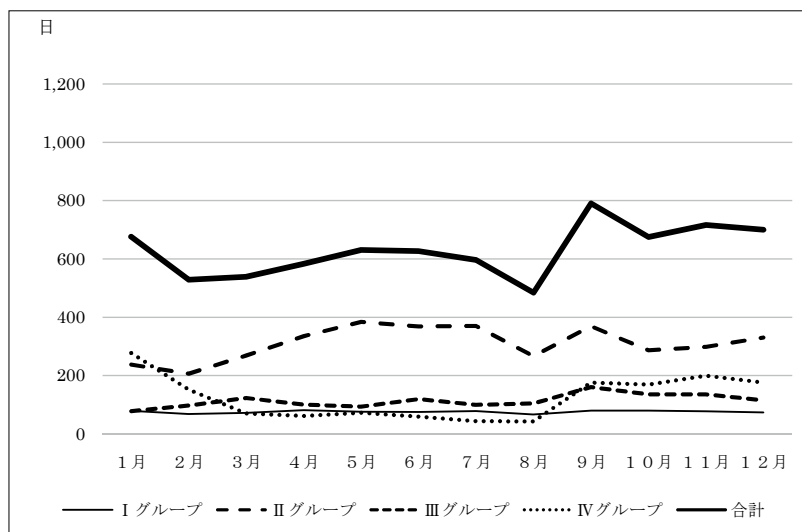
I グループから IV グループの総労働日数の推移について 1922 年・1924 年・1927 年で示したのが、それぞれ図 1・図 2・図 3 である。

図 1 勤務日数の推移（1922年）



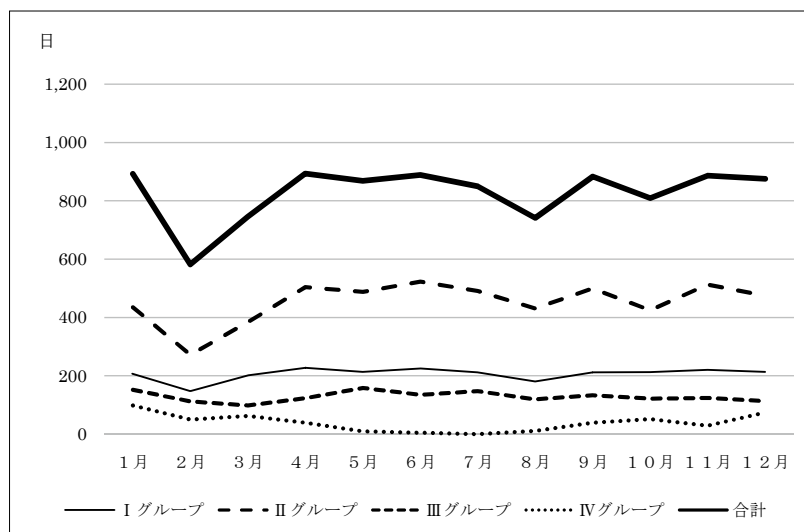
資料) 瀧田織布工場『賃金支拂簿』1922年

図2 総勤務日数の推移（1924年）



資料) 瀧田織布工場『賃金支拂簿』1924年

図3 総勤務日数の推移（1927年）



資料) 瀧田織布工場『賃金支拂簿』1927年

3つの図を通してみれば、IIグループが期間を通じて、総労働日数が比較的大きく、瀧田自営工場の主力グループであることが確認できる。Iグループは、1922年・1924年ではその比重は小さかったものの、1927年には年間を通じて200日の総労働日数（1日あたり）を安定して提供できるようになっていた。つまり、「近代的労働者」は1920年代を通じて醸

成されていったのである。

一方、一時的に労働力を供給する女工で構成されたⅢグループ・Ⅳグループは、Ⅰグループ・Ⅱグループが提供する労働力の不足を補完する役割を担っていた。例えば図1をみると、1922年ではⅠグループの労働日数は低い反面、ⅡグループおよびⅢグループのそれが大きいことが確認できる。ただし9月以降にはすべて労働日数が大幅に低下してしまった点を見ると、安定した操業を実現するには不安定な状況であったといわねばならない。加えてⅣグループについてみると、その推移に変動が大きい。特に1月と7月に労働日数が上昇していたのは、Ⅱ・Ⅲグループの減少に対応して労働日数を補完する役割を担っていたからだと考えられる。ただし8月以降は労働日数が急減したことから、補完の役割は不十分であった。

続いて1924年について図2から検討すると、Ⅱグループが瀧田自営工場の主力であったことは変わらない。その一方でⅢグループとⅣグループは、Ⅱグループの労働日数が落ち込む1月・2月と10月～12月に労働力を供給し、労働日数の不足を補完する役割を果たすようになった。

そして1927年を図3でみると、Ⅰグループの総労働日数が上昇して安定的に供給されるようになって、Ⅲ・Ⅳグループの比重が下がっていくことがわかる。これによって、全体的な労働力の供給が季節によって変動することが少なくなり、瀧田自営工場は安定した操業を実現することができるようになった。

おわりに

瀧田商店は、自身の市場の選択や綿布需要の拡大に応じた生産組織を構築すべく、第一次大戦ブーム期の1916年に瀧田自営工場を設立した。この瀧田自営工場は、その製品・織機を変化させることで瀧田商店の経営戦略に貢献していた。この自営工場を運営するために必要とされたのは、その生産を現場で担う労働者であった。この労働者は、農村労働の制約を受けず、一定時間・一定期間就労する近代的労働者であることが必要であった。

しかし1920年代初め、瀧田自営工場は女工を安定して就業させることができず、一時的に就労する女工に補完させることで対応せざるを得なかった。そして1920年代を通じて、年間200日を超える勤務日数を達成する女工が次第に主力として定着していった。この結果、瀧田自営工場は近代的労働者を有する力織機工場となっていった。

瀧田自営工場にみられたような近代的労働者の定着は、知多産地全域にとって同じく重要な課題であった。第一次大戦ブーム期から1920年代、知多産地に多数生まれた力織機工場は、農村に普及した問屋制家内工業という生産組織を大きく変質させた。産地問屋は、自営力織

機工場を設立するだけでなく、農村に設立された力織機工場を賃織工場として組織していったからである。これに伴い力織機工場は、農村から労働者を一か所に集めて、織布業に従事させなければならなかった。

このため、農村から集められた女性は、「資本－賃労働」関係の枠組みで管理され、農村労働や家族の制約から離脱させられることになった。つまり、明治期に大都市で始まった産業革命は、このときに地域へと波及していったのである。それゆえ、この農村女性の近代的労働者への変質は、地域の産業革命の達成を決定づける契機となった。

〔付記〕本稿は、加筆・修正のうえ、『近代日本の工業化と下請制』（橋口勝利著 京都大学学術出版会）の一部として収録され、出版される予定である（2017年2月出版予定）。

7月			8月			9月			10月			11月			12月			出勤日	給料	年間
出勤 (A)	給料 (B)	賃金 B/A	出勤 (A)	給料 (B)	賃金 B/A	出勤 (A)	給料 (B)	賃金 B/A	出勤 (A)	給料 (B)	賃金 B/A	出勤 (A)	給料 (B)	賃金 B/A	出勤 (A)	給料 (B)	賃金 B/A	合計 (C)	合計 (D)	賃金 (C)
25.0	11.3	0.5	23.0	11.2	0.5	29.0	14.5	0.5	26.0	12.9	0.5	29.0	14.3	0.5	28.0	14.0	0.5	318	156	0.5
27.0	25.8	1.0	23.0	18.2	0.8	29.0	24.7	0.9	25.0	21.8	0.9	28.0	24.0	0.9	28.0	24.1	0.9	316	282	0.9
27.0	24.3	0.9	22.0	17.0	0.8	28.0	21.6	0.8	28.0	23.8	0.8	26.0	20.9	0.8	28.0	21.7	0.8	315	248	0.8
28.0	18.5	0.7	23.0	13.3	0.6	29.0	16.8	0.6	26.0	15.6	0.6	28.0	16.0	0.6	28.0	16.0	0.6	314	180	0.6
27.0	17.6	0.7	23.0	14.6	0.6	29.0	18.3	0.6	26.0	16.9	0.7	26.0	16.9	0.7	28.0	18.2	0.7	307	199	0.6
28.0	27.2	1.0	23.0	18.5	0.8	29.0	25.5	0.9	29.0	25.6	0.9	26.0	22.4	0.9	28.0	24.1	0.9	305	281	0.9
24.0	10.4	0.4	21.0	10.1	0.5	29.0	14.5	0.5	25.0	12.4	0.5	29.0	14.3	0.5	22.0	10.8	0.5	304	149	0.5
26.0	25.2	1.0	23.0	18.3	0.8	10.0	8.4	0.8	28.0	24.5	0.9	29.0	25.4	0.9	24.0	19.4	0.8	300	246	0.8
212.0	160.2	0.8	181.0	121.2	0.7	212.0	144.2	0.7	213.0	153.4	0.7	221.0	154.1	0.7	214.0	148.3	0.7	2,479	1,742	0.7
28.0	15.4	0.6	22.0	12.1	0.6	17.0	9.4	0.6	20.0	11.0	0.6	29.0	16.3	0.6	28.0	15.4	0.6	299	164	0.5
27.0	23.8	0.9	23.0	17.4	0.8	29.0	23.3	0.8	6.0	4.1	0.7	26.0	20.1	0.8	28.0	22.4	0.8	296	251	0.8
28.0	17.5	0.6	23.0	13.0	0.6	28.0	15.6	0.6	28.0	15.5	0.6	28.0	16.0	0.6	28.0	15.4	0.5	289	165	0.6
26.0	25.5	1.0	23.0	18.3	0.8	29.0	23.9	0.8	28.0	23.8	0.8	29.0	14.0	0.5	28.0	22.8	0.8	289	220	0.8
27.0	17.5	0.6	22.0	13.4	0.6	28.0	15.8	0.6	28.0	16.7	0.6	28.0	17.3	0.6	23.0	13.8	0.6	279	162	0.6
25.0	23.5	0.9	23.0	18.6	0.8	26.0	22.8	0.9				20.0	12.4	0.6	27.0	17.4	0.6	278	221	0.8
23.0	9.5	0.4	21.0	8.6	0.4	25.0	10.7	0.4	25.0	9.9	0.4	28.0	10.1	0.4	26.0	9.0	0.3	278	110	0.4
22.0	9.8	0.4	23.0	10.8	0.5	29.0	16.8	0.6	28.0	16.1	0.6	28.0	16.5	0.5	28.0	15.9	0.6	271	134	0.5
28.0	28.6	1.0	21.0	17.2	0.8	25.0	21.2	0.8	15.0	12.9	0.9	29.0	27.3	0.9	27.0	25.0	0.9	271	271	1.0
28.0	11.2	0.4	16.0	6.0	0.4	29.0	11.6	0.4	28.0	11.6	0.4	29.0	11.8	0.4	24.0	9.6	0.4	268	107	0.4
21.0	12.4	0.6	23.0	14.7	0.6	29.0	24.1	0.8	28.0	23.9	0.9	26.0	21.3	0.8	24.0	18.5	0.8	266	192	0.7
27.0	14.9	0.6	22.0	12.1	0.6	29.0	16.0	0.6	20.0	10.9	0.5	13.0	7.2	0.6	12.0	6.6	0.6	263	144	0.5
25.0	15.7	0.6	21.0	13.7	0.7	27.0	17.1	0.6	26.0	16.8	0.6	21.0	14.8	0.7	26.0	22.5	0.9	257	185	0.7
26.0	11.1	0.4	21.0	8.9	0.4	27.0	12.8	0.5	22.0	10.7	0.5	28.0	15.1	0.5	23.0	12.0	0.5	254	116	0.5
26.0	21.5	2.9	12.0	9.4	0.8	18.0	12.8	0.7	28.0	23.8	0.8	16.0	15.1	0.9	20.0	14.8	0.7	247	213	0.9
10.0	4.4	0.4	17.0	8.4	0.5	28.0	13.6	0.5	14.0	7.0	0.5	28.0	14.0	0.5				246	120	0.5
28.0	29.8	1.1	23.0	17.3	0.8	20.0	12.4	0.6										230	235	1.0
20.0	12.0	0.6	13.0	7.6	0.6	17.0	10.1	0.6	25.0	14.8	0.6	26.0	15.4	0.6	26.0	15.1	0.6	226	133	0.6
9.0	4.3	0.5	21.0	9.9	0.5	11.0	5.5	0.5	23.0	11.0	0.5	26.0	11.2	0.4	27.0	10.7	0.4	217	97	0.4
13.0	4.0	0.3	23.0	7.7	0.3	29.0	10.0	0.3	18.0	6.3	0.4	28.0	9.7	0.3	28.0	10.8	0.4	209	70	0.3
24.0	13.3	0.6	18.0	10.2	0.6				15.0	8.6	0.6	27.0	12.1	0.4	22.0	10.3	0.5	208	114	0.5
491.0	325.5	0.7	431.0	255.2	0.6	500.0	305.5	0.6	425.0	255.3	0.6	513.0	297.7	0.6	475.0	287.8	0.6	5,441	3,424	0.6
11.0	6.2	0.6	14.0	8.2	0.6	26.0	15.2	0.6	27.0	16.0	0.6	16.0	9.1	0.6	9.0	5.3	0.6	196	114	0.6
28.0	29.8	1.1	12.0	10.9	0.9	4.0	3.2	0.8										196	211	1.1
11.0	4.9	0.4	20.0	7.8	0.4	23.0	8.8	0.4	20.0	7.8	0.4	24.0	9.2	0.4	25.0	10.0	0.4	187	74	0.4
27.0	17.4	0.6	10.0	6.4	0.6													184	117	0.6
28.0	27.7	1.0	11.0	9.0	0.8													184	177	1.0
21.0	14.0	0.7	19.0	11.6	0.6	15.0	9.0	0.6										159	105	0.7
			11.0	2.2	0.2	26.0	5.8	0.2	24.0	6.5	0.3	29.0	7.7	0.3	26.0	7.1	0.3	116	29	0.3
			17.0	8.6	0.5													111	55	0.5
			5.0	3.0	0.6	18.0	10.5	0.6	26.0	15.4	0.6	27.0	15.9	0.6	25.0	14.8	0.6	101	60	0.6
						21.0	6.5	0.3	24.0	8.8	0.4	28.0	8.5	0.3	28.0	10.4	0.4	101	34	0.3
147.0	109.9	0.7	119.0	67.7	0.6	133.0	59.1	0.4	121.0	54.5	0.5	124.0	50.3	0.4	113.0	47.6	0.4	1,535	977	0.6
						10.0	8.2	0.8	28.0	25.7	0.9	29.0	26.3	0.9	28.0	25.3	0.9	95	86	0.9
			11.0	6.8	0.6	29.0	21.7	0.7	23.0	17.4	0.8		15.2		28.0	19.4	0.7	93	78	0.8
															18.0	7.5	0.4	91	80	0.9
																		53	38	0.7
																		39	16	0.4
																		36	30	0.8
																		30	19	0.6
																		9	3	0.3
																		7	3	0.4
																		6	4	0.6
																		5	4	0.8
																		3	1	0.3
850.0	595.5	0.7	742.0	450.9	0.6	884.0	538.7	0.6	810.0	506.3	0.6	887.0	543.6	0.6	876.0	535.9	0.6	9,922.0	6,504.7	0.7